

第21回日本人類学会日本民族学会連合大会

標記の大会は、昭和41年10月5・6両日にわたり、長崎大学医学部において開催され、本研究所から篠崎信男（人口資質部長）、青木尚雄（人口資質部能力科長）の両技官が参加して、次の演題による研究発表を行なった。

大産業従事者に関する生活人類学的研究……………篠崎信男
学齢期における心身障害者数の推計について……………青木尚雄

大会日程は、二つの特別講演（内藤芳篤・永島正一両氏）のほか、人類学部門43、民族学部門34題の研究発表が2会場で並行して述べられるという形をとった。人類学部門の概況および印象は次のとおりである。

- (1) 研究内容がしだいに分化されていること。これは、ここ数年来の現象であるが、第21回大会においても、世界諸民族の生体計測（7題）、遺跡・遺物の発掘および古代人骨計測（6題）よりも、むしろ主流は現代人骨格の力学的構造（7題）、筋力・疲労および神経生理（6題）、霊長類生態学（4題）等に移りつつあるような印象を受ける。
- (2) 血清化学の発展。血液に対する生化学的アプローチは、第19回大会にも発表されていたが、今回は血清たん白の遺伝、フォスファターゼの変化、赤血球酵素型の分類等、人類学的応用に一步前進があったという感を深くする。従来、血液型によって区別されていた人種分類にも、新しい知見が加えられる可能性がある。赤血球酵素型による紀州と房州人の類似性は、その一例である。
- (3) 人口資質に参考になった演題としては、「生体計測による発育期双生児の長期観察」（体質・体格の遺伝影響について参考になる）、「騒音環境における乳幼児および学童の発育に関する研究」（公害・都市化と成長との関連について興味あり）、呼吸調整が生体現象に及ぼす影響について（とくに深呼吸が精神衛生・精神統一に及ぼす効果に関し注目される）等が印象に残った。
- (4) なお、「主成分分析法による体型分類への一考察」、「歴代徳川将軍の遺残毛髪による血液型判定」の2題は、それぞれ既製服サイズ設定および法医学的鑑定的面において、生活に役だつ研究といえるであろう。

（青木尚雄記）

日本統計学会第34回大会

標記の大会は、昭和41年10月7・8の両日、東京大学経済学部において開催された。本年度大会の共通テーマは、「Bayesian Statistics をめぐって」と「新国民経済計算の検討」の2題であり、一般研究報告は、一応数理統計学に関する報告、人口に関する報告、経済統計に関する報告の三つのグループに分け、合計31題の報告が行なわれた。

そのうち人口に関する報告は、

確率過程による人口の分布状態の解析……………鈴木啓祐
大都市の人口交流と出生との関係……………上田正夫
20代の生活パターン……………杉山明子
産業分類の改定試案について……………水野坦
社会統計学と「分析」確率論——R.カルナップ体系の批判的検討……………辻博

の5題であった。

（岡崎陽一記）